

銀貨の価値

新 井 純

奨励者紹介〔あらい・じゅん〕

日本キリスト教団世光教会牧師

「あるいは、ドラクメ銀貨を十枚持っている女がいて、その一枚を無くしたとすれば、ともし火をつけ、家を掃き、見つけるまで念を入れて捜さないだろうか。そして、見つけたら、友達や近所の女たちを呼び集めて、『無くした銀貨を見つけましたから、一緒に喜んでください』と言うであろう。言うておくが、このように、一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある。」

（ルカによる福音書 15章8—10節）

エラーコインというのをご存知でしょうか。10円玉や100円玉などの刻印がズレているとか、5円玉などの穴あき硬貨の穴が中心に開いていないなど、正常な硬貨とはちょっと違う、ミスのある硬貨のことです。それでも10円なら10円、100円なら100円として普通に使えますし、銀行に持っていけば新しい正常なものに交換してもらえます。見方を変えるなら、銀行に見つかれば即回収されてしまいます。だから、エラーコインそのものが世の中に出回ること自体稀で、そうするとコインの蒐集家にとっては垂涎的になります。

実は、私はそういうエラーものに何度か出くわしたことがあります。印字がズレて記号や数字がガタガタになっている紙幣、通常のものより少し幅が広い紙幣などが記憶にあります。今から20年ほど前になりレアなエラーコインを手に入れました。自動販売機でジュースを買って出てきたお釣りの中にあった50円玉がそれなのですが、表か裏か刻印がなされておらず、溶かした金属が枠に流し込まれたままのわずかに波打った状態だったのです。プレス機に異常があったなど、何らかの理由で片面だけ刻印されなかったようです。

さて、そのコインを手にした私はどうしたかというと、「変な50円玉を掴まされちゃったな〜」と、すぐさま近くのパン屋さんで使いました。幸い普通に使うことができて、ホッとしたものです。

それから1カ月もしないある日、「開運!なんでも鑑定団」というテレビ番組を観ていたら、なんとその50円玉が出てきたではありませんか。まさに一瞬とは言え私の手元を通過した、半面が刻印されていないエラーコインです。鑑定団に出るということは、もしかして相当価値のあるものなのだろうか、とドキドキしながら観ていました。

結果、いくらになったと思いますか。あっと驚く25万円でした。

その時の私の悔しがり方が想像できるでしょうか。エラーコインの知識があればまだ手元に残しておいたはずの50円玉。牧師になってまだ駆け出しの頃、謝儀（給与）も低い頃でしたから、謝儀を大きく上回る臨時収入は、当時の私たち夫婦を喜ばせるには十分な額です。でも、どんなに悔しがってもその50円玉は、すでにテレビ画面の向こう側に行ってしまう、画面をいくらつまんでも私の手には戻ってこないのです。

でも、よくよく考えてみれば、私は全く損をしていません。50円を50円として手に入れ、それを50円として使っただけです。ですから1円たりとも損をしてはいないのです。なのに、24万9950円損をしたと錯覚させられるのは、その50円に見いだされた付加価値のせいです。

100匹の羊の群れから1匹がいなくなった時、残りの99匹を野に残してでも1匹を捜し出さだろうという有名なたとえ話に続いて置かれているのが、今日お読みいただいた聖書箇所です。100匹の羊のたとえと同じような内容ですが、羊の代わりに10枚のドラクメ銀貨から1枚が失われます。

ドラクメ銀貨というのはどれくらいの価値（どらくめいの価値？）があるのでしょうか。聖書の巻末にある単位換算表によれば、ドラクメ銀貨というのはギリシャの通貨で、重さは約4.3gです。田中貴金属工業のホームページで調べてみたら、本日の売値は1g65円77銭、1ドラクメは銀としては約283円相当ということになります。もっとも、銀貨に使われている金属の価格が通貨の価値と等価ではないのは言うまでもありません。

では実際の価値はどれくらいかというと、1ドラクメは1デナリオンと等価、すなわち労働者の1日の賃金に相当する価値があったと言います。その銀貨を10枚持っていた女性が1枚を無くしてしまいました。

この女性は、ともし火をつけて家中を掃き、隅々までこの銀貨を捜します。そりゃそうです、1日の労働賃金に相当するのなら、この女性にとって1ドラクメは大変な価値をもっています。それを無くしたのだから一大事だ。だから、その1枚を必死に捜しますし、見つけ出したならご近所さんや友達に声をかけ、「無くした銀貨を見つけましたから、一緒に喜んでください」と言うだろうとイエス様はおっしゃるのです。無くした銀貨を見つけ出してホッとしたなどというレベルではなく、わざわざ他人に声を掛けて、自分が無くしたものを見つけたと報告するばかりか、一緒に喜んでくれと要求する、それほどまでに嬉しいというわけです。

もしかすると、この家にとっては、1ドラクメは単に1日の賃金相当というより、もっともっと価値のあるものだったかもしれません。たとえば、この女性が聖書によく登場する「やもめ」すなわち夫に先立たれた女性だったりしたら、当時の女性の社会的地位から察するに収入は極端に少ないでしょうから、1ドラクメはこの女性の何日分もの収入に相当したかもしれません。とにかく、この女性にとって1ドラクメは非常に価値のある、大切なものであり、私たちも自分のことに置き換えてみれば、大切なものを無くしたら必死に捜すし、それを見つけたら誰かに言わないではいられないほど嬉しくなるだろうということなのです。

ここで、今日お読みいただいた聖書箇所の直前の100匹の羊の箇所に少し覗いてみたいと思います。最初に100匹の羊のたとえが語られた状況の説明があるのですが、そこにはこうあります。「徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、『この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている』と不平を言いだした。そこで、イエスは次のたとえを話された」。

イエス様はよくこういう不平や不満を言われていました。時には、そのことがイエス様を追い詰める材料にさえされました。すなわち、罪人らと交わるとは何事か、というわけです。罪人と言っても犯罪人という意味ではありません。なんらかの理由で救いにあずかれないというレッテルを貼られ、虐げられていた人々のことです。徴税人も、異教の支配国のために働いているということであるとか、不正を働いて私腹を肥やしているということ（事実でもあり、そうでもないのではないか）のゆえに、忌み嫌われていました。その人たちがイエス様の周りに集まっています。そこで100匹の羊の話が語られ始めました。

よく、羊飼いをイエス様、羊を私たちに置き換えた話を聞きます。実に分かりやすいです。私たちの中のたった一人がいなくなっても、イエス様は捜し出してくださると。だから、羊を、救われるべきファリサイ派を中心としたユダヤ人たちに置き換えてみたらどうなるでしょうか。

自分たちは救われるはずの人間、すなわち価値のある人間だと思っていたファリサイ派。だから価値あるものが失われたら、必死になって捜し出されるのは当然であり、どこまでも必死に見つけ出される存在だと自負していたでしょう。

それに続いて10ドラクメです。1日分の賃金相当とは言え、羊に比べれば大したことはありません。だからこれを罪人に置き換えてみます。律法に照らし合わせれば、罪人は救いにあずかれませんか、律法にこだわっていたファリサイ派の人々からすれば、罪人や徴税人は取るに足らない存在だと言えます。

しかし、この女性にとって1ドラクメは非常に価値のあるものでした。だから必死に捜すだろうというわけです。そして、見つければみんなで喜びを分かち合いたくなるはずだと。それくらい価値のある存在なのだと。

そこで、羊のたとえもドラクメ銀貨のたとえも、結局同じことを言っているのだけれども、ここでイエス様に不平不満を言ったファリサイ派の人々にとっては、大きな違いがあったと考えてみるのです。つまり、徴税人や罪人などという、取るに足らない存在であっても、選ばれた民として誠実に神さまに仕えてきたという自負をもっている自分たちであっても、イエス様の前では全く等しく、失われれば必死に捜し出されるほどの価値をもった大切な一人だということか。自分たちが特別だと思っていたファリサイ派にとっては、自分たちが捜し出される価値のある存在であるのは当たり前。一方、罪人などは救われる価値もないと思っているのに、それでも主イエスは捜し出して救いあげようということか。彼らはそんな衝撃を受けたのではないかと想像してみるのです。

すなわち、100匹の羊のたとえも、10枚のドラクメ銀貨のたとえも、私たちにとっては両方とも、大切なものは当然捜し出し、捜し出してもらえんという話なのですが、ファリサイ派の人々にとっては、「え。もしかして、徴税人や罪人も救われる可能性があるってことですか」という、私たち以上に衝撃的な話として響いたのではないかとということなのです。

むしろ、自分は迷い出た羊であるという自覚をもたれる方が、私はそれだけの価値があるのだという自信もてるだろうし、1ドラクメが自分であると思うなら、こんな私でも見つけ出してくださるのだと、大きな慰めになるでしょう。

そう、結局、私たちは自分たちの社会の中である種の階層（最近ではインドの習わしにならってカーストなどという言葉も使われていますが）を作りがたり、自分より下だと思ふものを小馬鹿にしたり、逆に自分よりも上位だと思ふ人に必要以上に媚びへつらったりするようなことがあったりするのですが、イエス様の御前ではそういうもの、すなわち私たちの思い、それらに一切関係なく、皆が等しくかけがえのない存在なのだとすることが、明らかにされたのです。

ファリサイ派にとっては価値がないと思われていた罪人とされた人々も、イエス様にとっては大切な一人でした。同じように、敵対していたファリサイ派もまた、イエス様にとっては敵ではなく大切な一人でした。私たちの中では、私たちの自身の選びによって価値あるものとそうでないものを分けることは多々ありますが、イエス様にとって私たちは、皆等しく大切な一人として見守られているのです。そのことを思いなが

ら、今日も安心して過ごしたいですね。

2016年6月22日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録